哲學研究　第三十號　第三卷第九冊

ディルタイの記載的分析的心理學

勝部謙造

ウィルヘルム・ディルタイの所謂記載的分析的心理學(die beschreibende und zergliedernde Psychologie)に關する考は千八百八十三年に公にした彼の Einleitung in die Geisteswissenschaften に於て窺ふ事が出來るが、然し更に纏まつた詳しい考は千八百九十四年の Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie (Sitzungsbericht der Kgl. Preuss. Akademie der Wissenschaften zu Berlin)にあらはれて居る。この論文に對して、ヘルマン　ヒビングハウスが千八百九十六年に Über erklärende und beschreibende Psychologie(Zeitschrift für Physiologie und Psychologie der Sinnesorgane) に於て詳しい批評を試みて居る。これに對しディルタイは同年に出した Beiträge zum Studium der Individualität (Berl.Akademieberichte) 中に答辯を試みて居る。尚又千九百五年の Studium zum Grundlegung der Geistes-

wissenschaften (Sitzungsbericht der Kgl. Preuss. Akademie der Wissenschaften zu Berlin) に於て此心理學のプログラムに就いて詳論して居る。今茲には Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie とエビングハウスのこれに對する批評との梗概を次に紹介する事とする。但し前者の原本は京都大學圖書館にはないからして茲には M. Frischeisen Kohler:—Moderne Philosophie 中に抄錄したものによる。

一

デイルタイの云ふ所によると、從來の心理學は甚だ誤まつた方向を取つて居た。それは心理學をば一の說明學にしようとして居る事である。說明學とは一定數の一義的に限定せられた要素 (Elemente) によつて、ある範域內の諸現象をば悉く因果關聯 (Kausalzusammenhang) に包攝するものを云ふのである。物理學や化學やが物質界を說明するのは皆さういふ風にしてゞある。心理學も此方法によつて精神生活の諸現象を說明して行かうといふのである。即はち感覺とか表象とか快苦の情とか云ふ要素からして精神現象を組み立てゝ行き、而してこれ等の諸要素間を一貫して因果と云ふ大關聯が存在して居るものと見るのである。例へば聯想心理學派——

兩ミル、スペンサー、テーン等、それにヘルベルトも亦これに屬すべきであるが――の如きは其最も明かな例である。

さて此種の心理學の說明卽ち諸要素間の色々な關係を定確定する補助手段となるものは臆說（Hypothese）である。元來臆說と云ふ概念は色々に用ひられ得るのであるが、こゝでは次の樣な意味に了解してよろしい。卽ち我々の經驗全體をば歸納法によつて補足して行く結論は皆臆說である。この樣な結論の中には凡て「所與」から進みて「非所與」にまで廣がつて行く一の期待を含んで居るものである。あらゆる心理學的論述にはこの臆說が含まれて居る。例へばある記憶を溯つて以前の印象を思ひ出すのにも矢張り此臆說なしには出來ぬ。此故に心理學から此臆說の部分を全然除外することはもとより出來ない事である。然しながらこれを根柢として精神現象の說明を試むるといふ事は果して當を得た法方であらうか。

元來此臆說といふものが重要な地位を占めて居るのは自然科學に於てゞある。此自然科學の取扱ふ外界の事實は、我々の感官の門戶を通して、凡て特有な別々な、無關聯なものとして與へられるのである。この無關聯な事實を我々が結合し又統一を與へるのである。換言すれば我々の直接の觀察に存せる缺陷をば我々の推理に

よつて補足し、而して臆說によつて單なる俱在的或は繼在的なる所與をば關聯のあ々の感覺を內部から發して來る作用によつて綜合したものに過ぎないと云ふ事がる統一に結びつけるのである。我々は事物に統一がある樣に考へるが、あれは事物其自身に統一があるのではなくして、全く我々が、外界から來る感覺をば、我々の內部から起つて來る。ある働によつて綜合したものである。從つて自然認識には臆說は必然的に欠くべからざる補助手段である。而して又此場合には二つ以上の臆說が同樣に可能に思はれる事がある。其樣な時には其說を發展して見又一方實際の事實に照合して見て其內のある一をば證明確立し、他を凡て排拒するのである。これ等の手續を最も正確且つ確實ならしめるために數學と實驗といふ補助手段を持つて居るのは自然科學に取つては非常な强味である。斯く自然認識に於ては臆說は必須欠ぐべからざるものであるが、この方法を轉じて精神界に用ゐ精神生活中に起る諸現象をば臆說を以て說明しようとするのは果してどうであらうか。デイルタイは是が全く誤の基であるとして居る。

自然界はそういふ風に全く無關聯なものであり、我々の感官の門を通つて精神界に入るに及んで初めて統一あり關聯ある世界になるのである。然らば心理學の對象たる內界、精神界はどうであるか。この世界は其樣に間接に與へられるものではなくて、これは直接所與の世界である。體驗の世界である。卽はち精神的事實は內部から、實在として、生きて働く關聯として根源的に表はれて來るものである。旣に云ふた樣に自然科學に於いては、外界の個々獨立せる無關聯の事實に關聯を與へるためには是非とも臆說が必要である。何となれば自然界の事實は悉く我々の感官の門戶を通過して初めて吾々に知られるものであるが、自然其物が如何なる狀態にあるかといふ事は全く分らぬ。只我々が思惟によつてこれに統一を與へ關聯を附けるだけである。此働をするのが卽ち臆說である。然しながら精神界に於ては此臆說といふものは毫も必要でない。何となれば精神界其者に關聯が備はり居り、これが漸次直接に我々に明かになつて來るのであるからして、別に假定とか臆說とかを設けて說明するといふ事は必要でない。我々は自然をは說明(erklären)するが、精神をば領會(verstehen)するのである。勿理心理學にも臆說はあるにはあるが然しそれは自然科學に於けるとは全く別種な意味に於てゞある。自然認識の根柢に臆說

がある樣に心理學の根柢に其成立條件として臆說を許す事は全く不可能であり又無意味である。

一體臆說といふものは一の說に對して色々の他の說が起り得るのであるが精神界の事實は正確な決定性を持つて居ないからして、ある學說の徹底的結果と現實の事實とを比較して其正否を證するわけには行かないのである。それ故にある一の臆說を確定し他の凡てを除外するといふ事はどうしても出來ない。故に我々が、完全な因果的認識を建てようとすると、色々な異論が起つて全く惑ふてしまふ。而も此臆說をば精神的事實によつて證明するといふ見込はないのである。此種の臆說は色々あるが、例へば精神物理的並行論とか又意識現象をば原子の樣に考へられた要素に還元し、此要素が法則的な關係で相作用するものと考へる說とか又意志をば副次的のものとして凡ての精神現象を感覺と感情との兩部類に分たうといふ因果的說明に都合のよい樣な、精神構造說の如きは皆此實例である。或は又精神的要素と其間に起る過程とからして、自己意識といふものを導き出さうといふのも一の臆說である。又一度獲得した精神關聯が我々の推論や意志の意識的過程に非常に有力に又神秘的な影響を與へるものであるが、こういふ根源的な變化も只臆說によつ

て說明されるだけである。心理學の根本的な重要な部分に就ては皆臆說のみである。そして又此臆說と臆說との間には非常に激烈な論爭が起り其烈しさは全く形而上學の場合と變らない。此論爭を決着せしむべき力を有する何物も見渡す限り現はれ出てそうにない。論者或は物理學や化學でもそういふ時代があつたではないかと云ふかも知れぬ。然しこういふ自然科學は對象の安定とか實驗の自由なる行使とか空間的世界のよく測定し得られることとかいふ點に於て非常に好都合であつて到底心理學等とは比較にならぬ。其上心理學に於ては尙精神界と物質界との關係といふ到底解決の六かしい形而上學的問題が絕えず附きまとふて居て、精神界に於て確實なる因果關係の認識を純正に徹底せしめることを一層困難ならしめるのである。

一體說明心理學は我々の精神生活の世界をば個々の要素から築き上げて行かうとして居る。而しで其各要素をば一の固定せる事實として取扱つて居る。然しこれでは到底其眞相を捕捉することは出來ぬ。例へば茲にある表象が吾人の意識にあらはれて來たとする。そうすると說明心理學は色々の表象があらはれたり消滅したりするのを固定した事實として觀察じ、それから得て來た一般的法則を以て其

表象を說明しようとする。然しながら我々の實際生活に於ては一の心像卽ち情意から分離することの出來ない一の表象は決して固定した事實ではない。其運命は感情と注意とによつて支配されて居る。卽ちこれは一の衝動的勢力を持つたそれ自身で一の生命である。一の過程である。それ自身で成立し發展し又消滅するものである。

然らばこの心像はどうして左樣に變化する事が出來るか。これは其一部分が落ちてしまふか又は働かなくなるからである。例へば茲にある物理學者が夢に空中を飛行したといふ經驗をしたとする。其場合には重力といふ事の經驗は彼に取つて失はれて居たからである。或は又畫家があるモデルを前にしてマドンナの畫を描くとする。そうすると其モデルの持つて居る色々の特性の中でマドンナと矛盾する樣な部分は彼に取つては働かなくなつて居るのである。かく我々の心像の一部分は絕えず脫落してこれに代るべき新要素が加はつて來る。それで始終變化發展して行くのである。

然し如何に變化しても發展しても意識の働が休止しない以上は矢張り殘つて居るある內的の核心がある。これが、卽はち我々の精神生活の關聯である。而して刻

々に現出消滅する部分はこの關聯に附屬せる肢體である。この關聯は凡ての肢が與へられて後初めて意識せられるのではなくして、初めからある一の肢と共に直接に與へられるものである。かくの如く吾人の精神作用は時間的に經過する一の生きた出來事である、一の核から漸次發展生長して行くものである。こういふ働をテイルタイは體驗(Erlebnis)と名づけて居る。

三

說明心理學の主張者が精神現象に臆說を適用する根據はいづれに置いて居るかと云ふに、彼等はこれを自然科學に求めて居る。然しながらこれはまことに間違つた考である。一體凡ての學問の研究方法はそれ〴〵其對象に應じたものでなければならぬ。既に述べたように自然界と精神界とが非常に違つたものであるからには、我々は心理學に對しては自然科學とは全く別種な對象取扱法や原理やを求めねばならぬ。

此故に說明心理學の難點を救ふために生るべき新しき心理學は從來の構成的方法論者の取つたのとは全く逆な方法を取らねばならぬ。卽はち構成的ではなくて

分析的でなければならぬ。新心理學は其職分として次の二點を具備することを要する。第一に精神生活の全實在が記述され又分析されなければならぬ。第二にこの記述と分析とは能ふ限りの度合の正確なものでなければならぬ。從つて其對象となるものは充分に成熟した人間で、完全に出來上つた精神生活を營むものでなければならぬ。

我々の精神生活の核心となる關聯といふ事に就ては既に述べた。此關聯は我々は只斷片的にのみ經驗する事が出來る。此點、彼點と順次に明かになつて來るものである。なぜなれば我々の精神力は其主要な特性に從つて、ある內的關聯の肢の甚だ少數のもののみしか一時に意識に上すことの出來ぬものであるからである。然し漸次に我々は此結合を意識して來る。而して意識の內容には無限の種類があつて、それで同一の結合法が幾度も〳〵繰り返されてあらはれるものである。此包括的結合が漸次進んで行き終に一關聯を形成する樣になると、其意識も漸次明晰又確實になつて來るものである。甲の肢が、規則的に乙の肢を呼び起すか又は甲部類の肢が乙部類の肢を呼び出す時は、他の場合に乙は又丙を呼び出す樣になる。かくして終にこれ等の肢を有する全體の關聯の意識が普遍妥當的に明になつて來るので

ある。この様に吾人は渾沌たる變化からして觀察作用によつて注意を集中して、ある特殊のものを分離し、持續的知覺又は記憶といふものに於て正確なる捕捉に確持しようとする。

精神的變化が迅速に流れて行く間に、我々は其内の一を撰び出しこれを別置し、これに強い注意を注ぐ。この別置作用が卽ち其後の抽象作用となる條件である。我々が具體的關聯からある機能とかある結合法といふものを抽き出す事の出來るのは全くこの抽象作用によつてゞある。又一機能の絶えず繰り返さるゝ形式、感覺や感情の强度といふやうな事は只此普遍化によつてのみ知らるゝものである。凡そこの様な論理作用によつて區別、同一差異の度合といふやうな事が決定される。又分類とか命名とか定義とか云ふ事はこれから生ずるのである。

次に精神生活の理解に必要な特性は我々の直接體驗に於ては Gemüt 全體が一所に働くと云ふ事である。個々の變化は精神生活の全體によつて體驗にあらはれて來る。而して此個々の變化の屬する大全體卽關聯は直接に與へられるものである。我々は說明は純粹の知的作用によつて行ふが、領會は Gemütskräfte 全體の合同作用に依つて行ふものである。この事が我々が自己及び他人を領會する領會作用の性質

を定める。我々は直接に與へられる全體の關聯より出發して漸次其内の各部を捕捉するに至るのであるから、個々の命題とか身振とか行爲とかの領會を可能ならしめるのは我々が常に之れ等の屬する一大全體の關聯意識に生活して居るといふ事からである。つまり一口に云ふと凡ての心理學的思索は全體の理解が部分を解釋することを可能ならしめ又制約するといふ根本原理に歸するのである。

此關聯は始終我々の知識が進むに從つて、より高い統一に進むものである。甲は乙に對しては肢となるが、乙關聯も亦丙に對しては一の肢となる。かくして凡ての特殊は漸次に普遍にと進んで行くのである。然し特殊と云ひ普遍と云ふも畢竟相對的の事に過ぎない。此故に各の關聯は皆我々の精神生活の發展の階段に於ける相對的眞理しか現はす事は出來ないものである。然し各瞬間に於ては少くとも各最も本質的、必然的なものをあらはして居る。而して此關聯のあらはす眞理の確實性は生活其自身に根據を有つて居るから、單純な思惟必然性といふやうなものではない。思惟關聯と云ふやうなものではなくて衝動、意志、同情等に於て與へられて居る、我々の生活其者の關聯から來て居るのである。

四

此新心理學をばディルタイは記載的分析的心理學と名づけて居る。彼の語を以てあらはすと、これは die Darstellung der in jedem entwickelten menschlichen Seelenleben gleichförmig auftretenden Bestandteile und Zusammenhänge, wie sie in einem einzigen Zusammenhang Verbunden sind, der nicht hinzugedacht oder erschlossen sondern erlebtist である。記載とふても觀察とか分析とか實驗とか比較とか凡てこれに必要なあらゆる補助手段を利用するのは無論である。然し一般精神科學の基礎としての此心理學の意義は精神的關聯の捕捉が決して推理思索の結果得らるゝのではなくて直接に與へられるものであるといふ點にあるのである。此點からして新心理學は詩人の著作とか大文學者の人生觀等にも矢張り其課題と材料とを見出す事が出來る。

蓋し記載的態度と說明的態度との對立は自然科學に於て充分にあらはれて居る。然し記載學の概念は心理學に於てと自然科學に於てとは餘程違つた趣を備えて居る。心理學に於ける記載といふ方が遙かに深い意義をもつて居る。植物學や動物學でさへ、機能といふ關聯から出發して物質的事實をば心理學的事實の類推を用ゐ

て解釋するといふ事から成立して居る。心理學では此機能の關聯は體驗に於て內部的に直接に與へられるものである。凡て一つ〳〵の心理學的認識は此關聯を分析（Zergliederung）する事である。卽はち精神界に於ては構造（Struktur）といふものは直接に又客觀的に與へられるものである。是を以て心理學に於ける記載は疑もなく普遍妥當的な根柢をもつて居る。我々は個々の肢に補足を行ふて其屬する關聯を見出すのではない。心理學的思惟は只與へられたる關聯を明かにし又見分るといふ事である。而して此記載作用のためには比較、區別、度の測定、別置及び結合、抽象、部分を全體に結合すること、個々の場合より Gleichförmigkeit を導き出すこと、個々の變化の分解、區分、といふたやうな論理的作用が用ゐられるのである。此故に記載的心理學は又同時に分析的心理學でなければならぬ。

茲に云ふ分析といふ語は、ある與へられたる複雜な實在をば、肢的に分けて行く事を云ふのである。卽ちこれによりて一實在中に結合されて居る各部分が分離されるのである。この分離される部分は實に多種多樣である。論理學は一命題を分析して兩前提と結論中から三つの概念を拾ひ出す。化學者は一物體を分析し、實驗により其材料たる元素を分離する。物理學者は音響とか光とか云ふ現象の各成素を

ば運動の法則的形式に於て示す。かく色々違つては居るがこれ等は畢竟ある實在をば其各肢體に分ちてこれによつて眞の成素を見出すと云ふ事に其窮極の目的を持つて居る。而して一段に歸納とか實驗とか云ふ事は只補助手段に過ぎぬ。こういふ一般的の意味に於ては分析的態度は自然科學に於ても精神科學に於ても共通である。然しこれを適用する範域に應じて其趣を異にして來る。精神生活を普通に理解する事に既に明かに、區別、分離、肢體に分けること等が伴つて居る。「關係さす」といふ作用に人間の精神生活の理解のあらゆる深みと廣さとが基いて居る。而して區別、分離及び分析はこの理解を判明明晰にする。意識の生ける全體、機能の關聯、抽象によつて見出された此關聯の普遍妥當的形式及び結合といふような點に分析作用は其背景を有して居る。分析の提出する凡ての問題、分析の作り出す凡ての概念は皆此關聯に制約せられ、又其關聯中に位置を占める。

此故に、新心理學は精神生活の普遍妥當的に捕捉された關聯から出發して、此關聯を個々の肢に分解し、其部分及これを結合する機能を出來るだけ深く記述し又調査するといふ事でなければならぬ。かの說明心理學が精神的變化の全因果關聯を構成して行かうといふのは誤まつて居る。精神生活は部分から集成せらるべきでは

ない。Zusammensetzung によつて構成さるべきでもない。說明心理學は臆說を以て初まるのであるが、記載的分析的心理學はこれを以て終るのである。此新心理學に取り必須な唯一條件は既に述べたような普遍妥當的な、法則的に全精神生活を包括する關聯が、說明心理學の提出せる臆說を適用することなしに可能であるといふ事だけである。

五

然らば說明心理學は全く駄目なものであるかと云ふに必らずしも左樣ではない。此派の主張する臆說の證明と徹底とをはかるといふ事は心理學の進步には最も必要な方法であるといふ主張はある意味に於ては正當である。なぜなれば或場合には觀察、比較、實驗及び分析といふやうな作用が臆說によりある方向に向けられ更に新方面の研究を促す事が屢あるものである。けれども心理學に於てはある特定の一臆說のみが正當であり又精神生活の說明の眞の根據となるものであつて、他は凡て駄目であると主張する事は全く不可能である。これは前述の如くに說其者の性質上から來て居る。故に現在の如何なる說明心理學も到底一般精神科學の根據と

なる事は出來ないばかりでなく、これは精神科學に取つては全く危險である。說明心理學は精神物理的並行說からして生理學と密接な關係があるので時に「淨化されたる唯物論」といふ名稱を與へられて居る。實際說明心理學は全く假面をつけた唯物論であつて一般精神科學の發展、殊に財政學とか、刑法とか又歷史とかに甚だ面白からぬ影響を與へて居る。

之を要するに心理學はあくまでも記載的方法及び分析的方法を根本とし、說明的構成的方法をば其限度を充分に意識した上で副次的に用ひ、又これに用ふる臆說は決して他の假定的說明の根據とならないといふ事が必要である。かくして初めて心理學は、かの數學が自然科學の基礎である樣に、精神科學の基礎となる事が出來るのである。

最後にディルタイは此記載的分析的心理學其者の構造に就いてはどういふ考を持つて居たか。彼は曰く此心理學は一般的と特殊的との二部分を持たねばならぬ。特殊的部分は知識(知覺、表象及び認識を含む)、衝動感情生活、及び意志動作なる三大肢に分たれねばならぬ。又一般的部分は第一には心理學者の一致する樣な術語を紹介するために記述と命名とをやらねばならぬ。而して第二に次の三つの主要なる

普遍的關聯を取扱ふのである。即ち第一に幸福や滿足を求むる精神作用の統一(ディルタイはこれを Strukturzusammenhang とも云ふて居る)第二に精神生活發展の關聯、第三に既に獲得せる精神的關聯(普通に所謂無意識)が個々の意識作用に及ぼす影響である。

六

以上がディルタイの記載的分析的心理學に問する考の輪廓である。これに對してエビングハウスは大略以下に述ぶる如き批評を試みて居る。

近代の科學的心理學の長子として生れ出でたのが所謂聯想派の心理學である。が然し此聯想心理學は充分望み通りな完成したものではなくて、ある根本的缺點を伴ふて居るものであると云ふ事は確かに承認せねばならぬ。此缺點は恐らく次の二點に其源を發して居よう。即ち聯想派の人々は精神的事實を理論的に取扱ふ力をあまりに過信して居る事と又彼等は物理化學の類推をあまりに用ゐ過ぎた傾がある事とである。つまり彼等は精神界の特殊な統一又は全體性といふものゝ價値を充分に認めて居ない所がある。例へばこゝに甲の音調と乙の音調とが調和して

居るとする。此調和音といふものは只單に甲、乙兩音調のみから成り立つて居るのではない。其外にまだこれ等甲と乙とが其部分となつて居る全體といふものゝ意識がこれに加はつて居るものである。こういふ統一には色々の階段があつて、其最高のものが目的の統一である。聯想派かもし物理化學的類推よりは生物學的類推を用ゐたならば、此點に關して今少し深い見解が得られたであらう。何となれば生理學に於ける生活有機體といふものに於て此關係がもつと明らかにあらはれて居るからである。一筋肉は幾多の纖緯から成立して居る。然し筋肉なる有機體の特性は單に纖緯が多數にあるといふ事にはなくて、其纖緯を集めて居る形式、序列といふ所にある。一有機體の生命は循環、呼吸、排泄等の多くの過程から成り立つて居る。然し、これ等の過程は並列して行はれるのではなくして、其一つ〳〵が皆互に密接に關係し、如何におほくとも內的に結合された一全體を形成して居る。最後にまた生物界に於ては凡てを包括する最高の目的——卽ち個體生活の保持及び種族の保存といふ窮極の目的にして且凡ての機能の働を支配するものがある。然るに不幸にして聯想派はこの生物學的類推に從はずして物理學的類推を行つた。此故に、彼等は例へば空間的直觀は筋肉感覺と色又は觸の印象との聯合の成果となし、又或は自

我とは表象と感情の集合に過ぎないといふ樣な見解を懷くやうになつた。

七

この精神的統一といふ點に主力を注いだディルタイの議論は一般的には甚だ正當な改革運動であると云はねばならぬ。然し此運動は今日では少し時代遲れの觀がない事はない。心理學の現狀を知る者にはディルタイの此新運動等は最早何等の必要もない。實驗と測定とを心理學中に輸入してから斯學には一大革命が起つて居るが、それはおいて問はないとしても、最近十年間(一八四〇—五〇)に於ける心理學の發展はこの聯想派の缺點をば本質的に全然除いてしまつて居る。空間的延長性とか時間的持續とか運動とか差異性とか數とか云ふものは聯想的集群ではなく、又化學的結合の一種でもなくて、其原始的な形では特有な根源的な精神內容であると主張する色々の生得說論者がある。又精神的統一卽ち目的の統一が根本的意志作用にありとションペンハウエルは說いた。これと同一の考が生物學の衣をつけてスペンサーにあらはれて居る。最近では此考がヴント統覺說となつて居る。これを基にして樣々な人々が色々な研究をして居る。

かく聯想心理學の昔の輪廓の內で精神的統一の眞價を漸次認めるといふ運動は未だ決して終結して居ない。或人は生得說に强く傾き、他の人は經驗說に傾いて居る。或は同一人が場合によつて違つた方向に傾く事がある。例へばヴントは統覺作用と同時に又化學的結合といふ範疇を許して居る。前者は聯想の結果ではなくして、意識の最終の素質に其根源を有して居る筈のものであるが後者はトーマスブラウンや兩ミルから得來たものであるは疑ない。右の如くであるのにディルタイはこういふ最新の狀態は少しも注意せず一向顧みない。從つて彼が現代の心理學と銘づけて居るのは實は甚だ當らない。これが此の說に於ける第一の缺點である。

八

第二の缺點はまだ〳〵重大なものである。現代の說明心理學に就てディルタイの考が違つて居る樣に過去に於ける此派に屬するものに就ても決して正鵠を得て居ない。一體ディルタイは一口に說明心理學と云ふて其實例として勝手に多數の獨英佛の學者の名をあげて居る。而してこれ等諸家の見解が說明心理學の特性といふ下に果して悉くあげつくされて居るかどうか。

彼は說明心理學の特性をあげて色々論じて居るが、その大部分は此種の心理學者の誰にも當てはまらなくて、只一人のある特殊な學者にのみ當る所がある。それは卽ちヘルバルドである。それだからして所謂聯想派といふものに就いてもディルタイの論はあまり當てはまらない。ヘルバルトは獨逸內では意義もあらうが然し彼の例の形而上學的機巧や根據のない假構や等は外國では一向顧みられない。之に反して英國の聯想派と云ふたら世界的に有名になつて居る。其上に現代の生ける心理學的探究を普く見渡して見るにヘルバルト程に思想上現代と遠い間隔を有せるものは他にない。今以下に三個條に分ちてディルタイの議論について此點を明にしよう。

先づ第一にディルタイは說明心理學の特性を說述する時に其本質的の特性として、これは精神生活をば「ある一定數の要素」から導き出さんと欲すといふ事を述べて居る。然し抑多數の聯想派學者の內誰がこの樣な譯の分らぬ窮屈な方法を主張したものがあらうか。成程聯想派の人々は精神生活の與へられたる事實をば、それ自身に區別し得べき最終の心像及び其間に働く最も簡單な過程に還元しようと欲するのは事實である。然し其要素の數が制限せられなければならぬか否かといふや

うな事については誰も定めた者はない。精神要素の數の多少は事實自身をして定めさせる。而して我々は事實の中にひそんで居る强制力に從ふべきである。かの小ミルが言ひ表はした樣に「出來るだけ還元するが然し事實をばいさゝかたりとも損はない樣にする筈である。場合によつては此要素の數を傳承に反抗して著しく殖した事もある。事實の導くまゝにするといふ事になれば其數は殖えるか減るかいづれにしても其事實其者の命令に從ふべきである。要するにデイルタイの誤謬は聯想派に共通な本質的な特徴をば、捕えないで、つまらない皮層の特徴を捕え來つて兎や角云ふたのに過ぎない。

第二に說明心理學が精神生活を捕捉する手段となる原理をば何處より得來りしか。デイルタイは說明心理學は此要素をば臆說的に受け納れ又歸納的に導き出されたものであるといふ所に根據を求めて居る。彼は說明心理學は臆說を以て初まるが記載的分析的心理學は臆說を以て終ると云ふて居る。又他の所では說明心理學に於いては新しく演繹的に決定されつゝある說明要素と云ふものがあはれて來ると云ふて居る。それで直接に與へられた實在をば、一方では最終窮極これ以上區別の出來ないやうな要素に分析し又他方其關聯の一般的規則を得んと力めるので

あるからして說明心理學の原理も矢張り直接所與の實在を觀察することから得られたものである。ディルタイの新心理學と同じく矢張り觀察、分析、及歸納を用ひて得たのである。聯想派に於てはミルでもブラウンでもスペンサーでも分析と云ふ事をやかましく云ふて居る。然しこゝに只一人だけ例外がある。即ちディルタイが一般說明心理學に對してなせる批難が最もよく當るのがある。それはヘルバルトである。彼は要素たる臆說的假構及び形而上學的前提から演繹的派生といふ事をやつて居る。ディルタイは古の心理學の欠點をば偏見と誤まれる研究方法とに歸して居る。それて此欠點を補ふために彼は新らしい方法を主張し一種の科學的革命を齎した。然し彼がこの新心理學の內容及び方法として主張せるものは何も別に新奇なものはない。これは彼が非常に貶した說明心理學の輪廓內に既に存して居たものである。此故に吾人はディルタイの云ふ如く全然方法を改める必要はない。只在來の方法を益々發展さしさへすればそれでよろしいのである。

第三にはディルタイの因果概念についてゞある。彼は說明心理學の要素の關係を說明するために其構成的要素として因果といふものを働かせて居る。而して精神的變化の因果關聯は Causa aequat effectum の法則に從ふものであると說いて居る。

これは一體どういふ意味であるか。彼はある箇所では「自然認識は運動變化の範疇に於て原因と結果との間に同等といふ事を確立する學問である」と云ふて居る。又他の箇所では「精神的關聯の各肢が相互に結合して居るのは外的自然介を支配して居る因果性卽ち原因と結果との分量上又性質上同等なりといふ法則に應じて一より他が從ひ出つる樣な關係には決して無い」と云ふて居る。この樣な因果性は物理學上に於て普通なものである。卽ちあらゆる外界變化を機械的に解釋する臆說である。斯くの如き因果觀念はいかにも例のヘルバルトのStatik und mechanik des Geistesの根抵には確かにある。然しこんな考は既に昔に死んで葬られてしまふたもので今更やかましく騷ぐにも當るまい。

九

次に我々は進んでディルタイの全體の議論の中心點といつたやうな所を檢べて見る。先づヘルバルド派と聯想派との一致する點は彼等は共に何處からか得來つた原理を用ひて更にひろく押し廣めて行かうとするのである。意識要素以外の精神生活をば法則的成果、法則的關聯としてとらえ見ようとするのである。なぜそ

ういふ説明を欲するかといふ事は茲では論外である。が多分我々の因果欲を滿足しようといふ思惟の强い要求から來て居るであらう。ディルタイが强い議論の鋒先を向けたのは先づ此點である。説明心理學は精神介の特性を無視して居る。精神介には關聯(因果的關聯も其一つだが)が根源的に與へられる。故に此精神界では一關聯は説明を待つて初めて明らかになるのではない。かの直接所與中にある欠陷でさえも決して説明や構成によつて補足されてはならない、それ以外の他の方法によらねばならぬ。

實際此欠陷の補塡といふ事に全問題の核心が存して居る。此問題についてはディルタイは屢述べては居るが大抵は議論の脊景の中にかくされてある。彼の力説したのは精神生活の關聯は根源的なものであり、而して此直接の所與を記載分析することによつて心理學の任務は本然的に解決されたものと考へた。然し彼が其論文の終に於て心理學の問題を具體的に取扱ふに至つて初めて此問題が正當に彼を動かした。成程關聯とか統一とかいふものは精神生活の內にあつては屢根源的に考へられるものである。然し我々の精神生活に於ける最大最重要の關聯は窮極の事實として吾人に直接に與へられるのではなくして我々が創作して初めて存在す

るものである。

例へば今私に突然今日の午後舟遊びに人を招かふといふ考が起つて來たとする。そうするとこれは他の思想や知覺とは如何なる關聯にあるのか。どうしてこういふ考が起つたか。なぜ又今日この考が起つたか。これに對して我々の意識狀態を分析することによつては答は得られない。なる程凡ての意志は無から生ずるのではなくて源因といふたしかな關聯から生ずるものであるといふ事は分つて居る。或は又少年時代から成人に至る發展の關聯の如き又前に述べた統一的目的の關聯の如き皆そうである。これ等は我々に取つて非常に大切なもので我々の全精神生活を包括的に支配して居るものであるが、然しこれ等は直接には與へられぬ、色々な複雜な手續を經て初めて我々が認める事の出來るものである。

この精神生活に於ける目的の關聯を明らかにすることは非常に困難であつて、デイルタイも心理學全體中で最も暗い部分であるといふて居る。彼は茲に蜥蜴の例を引いて、動物に於ける刺激と運動との關係を說き、武器のない動物が自己保存の知覺によつて合目的反射作用による運動で自己を守つて行く事を述べ、次て此關聯を知る手續を明にしようとした。これを押し廣めて考ふれば凡て外的刺激により呼

び起された知覺がこれに結合せる感情と共に精神的に價値あるものとして感覺せられる場合には皆此理があてはまる。

斯く考へて見るとこの樣な關聯は實際直接に與へられるものではなくて全く想像作用によつて推量されるのに過ぎない。蜥蜴の運動によつて考へ出された精神生活も想像作用によつて初めて關聯を得たのである。そうすると茲に重大なる一の問題が起つて來る。記載的分析的心理學には明かに或點に於て直接に眞實に體驗せられる精神內容や關係がある。然しこれと同時に直接に體驗せられない他の部分もある。それで此直接に與へられざる部分に直接に與へられた部分の關聯を寫しこれによつて所與の缺陷を補足して行くのではあるまいか、そうする外に法がないのである。偖此處迄論じ來て見ると說明心理學が臆說を使用するのと少しも差異はない。

ディルタイは屢「意識は自分自身の脊後に隱れてはいかぬ」といふ事を云ふて居る。が彼の此新心理學のやり方は矢張り知らず〳〵の內にそれをやつたのではあるまいか。卽はち意識は後の方に隱れてこれから引き出して來た部分的內容で一の論理的關聯を構成したのではないか。しかも此關聯は實在界にては其まゝの形にて

は決して起らなもいので只我々によつて想像して作り出されたゞけのものである。これは矢張り一の臆說的構成法によつて直接所與を改造したものであつて心理說明學のやる所と少しも選ぶ所はない。

一〇

上述の如く記載的分析的心理學は所與に存する缺陷の補足方法に於て說明的心理學と同じく假定的である。然し元來此臆說といふものは全く其樣に不確實なものであらうか。ダーヴィンの進化論は確實性といふ點からら云へば今迄も亦今日でも甚た不確かなものである。なせなれば充分に證明し他の可能性を悉く排拒するといふ事は不可能であるからである。然しこれがために進化論は生物學及び一般科學に及ぼす絕大なる要求を全く捨てゝしまはねばならぬだらうか。臆說は決して正しからざる態度や改革を要する態度の徵候ではない。これは寧ろ健全なる發展の徵候である。而して此進步發展の階段に於ては、疑はしい物に注意することによつて初めて一層確實なものが生れ出るのである。

一體心理學に於て經驗の缺陷を補足するには決してあらゆる他の科學と違つた

態度方法を用ひてはならぬ。例へば心理學と最も似寄つて居る生理學に於てもそうである。斯學に於ても我々が期待するやうな確乎たる纒まつた解決ではなくて、至る處臆說ばかりである。而して臆說が相互に矛盾し合つて居る。遺傳、生成、滋養、神經過程について我々の有するのは皆假定又は、臆說である。而して何時いかにして此大きな謎が解ける時の來るべきか誰人も分らぬ。然しそれだからとて生理學の榮えて居るのを拒む人はない。故に心理學は於ても全く臆說を取つてしまはふといふのは甚だ淺薄な考である。

抑心理學の不確實は說明とか臆說的構成法とか云ふ所から來るのではなして既に精神的事實を單に feststellen する時に初まつて居る。ディルタイが普通妥當的確實性を許して居る記載及分析でも既に疑と相互に矛盾せる結果とをもたらすものである。內的經驗の確かなる研究でさへも甲にはAを與へ乙にはBを與へる事がある。而して色々な證明を試みても其事實を全く疑無き明晰なものとする事は困難である。心理學も如何なる方法によつても凡ての臆說を避けて徹底的正確を期するといふ事は不可能である。記載的心理學でもそれは出來ぬ。

例へば茲に注意といふ働がある。これは一體どういふ事を云ふのであるか。フ

エヒネルは表象を識閾上に強く高める事であると云ふて居る。ストウムプはある内容に氣をつける時に伴ふ感情くはしくば快感であると云ふて居る。ヴントは普通の所謂意志行外的爲により常に豫想される內的意志又は原始的意志作用であると云ふて居る。デイルタイは或る所ではこれは意識の强き動搖であると云ひ他の所ではヴントと同じ樣に意志の態度であると云ふて居る。此一問題についても既にこれだけの異說あり、其內孰れが最も正しくあらうか。デイルタイに云はすと臆說を用ひたり構成法によつたりしてはならぬ、只單に直接體驗を注意すればよろしいと云ふであらう。

デイルタイは說明心理學の解決し得ざる臆說の實例を五つあげて居る。然しこれ等もこういふ見地から精査すると其數は非常に減じてしまふ。彼の最後の例は意識と無意識との關係であつて此事は彼自身も承認して居るからこれは別にしておく。第三と第四卽ち意志及び自己意識の本質に關するのは精密に云ふと此處に入るべきではない。こゝで問題となるのは說明や派生の不確實といふ事ではなくて觀察及び分析と云ふ事である。「汝は汝の意志又は自己意識を精しく觀察し又分析して汝自身に何を見出すか」これが問題である。そうすると結局第一と第二、卽ち

精神物理的並行論及び精神生活の原子的機械的構造說だけとなる。この內前者は半分は生理學に屬する。そうするとディルタイが「四方を臆說の深霧に閉されて」とか仰山に云ふたのも甚しき誇張に過ぎない事となる。

之を要するにディルタイの主張するところは心理學者の既に普く知り又實行して居る所である。又彼がやかましく批難せる點は誰人も嘗て主張せる事なき全く架空のものか又は彼の意の如何に協らず事實其自身の要求から來て居て如何ともし難きものかである。

エビングハウスの批評は凡そ右の樣な論である。今茲には詳しく兩者の論點を比較してこれに批評的考察を加へる事は他日に讓る。只エビングハウスの批評はいかにも鋭い事は鋭いけれども、ディルタイの考の皮層のみを捕え自分の守れる傳來の心理學の尺度を以て凡てを律し敵手の思想中に非常に貴重なあるものゝ存せるを認めるだけの寬容を缺いては居まいかと思ふ。

ディルタイは一種の不可知論者と云ふ事を得べく、彼の時代は今日とは違つて居は自然科學全盛時代の後を受けて反抗の第一聲を揭げたものであるだけに彼の議

論には今日の新しい形に改造して見なければ餘程粗雜な點もある。然しそれにも拘はらず彼の體驗領會作用等についての考には餘程面白いものがある。心理學、美學、歴史哲學其他に對し餘程深い暗示を與へる。

今參考のため左に本文の卷頭に掲げておいた外の此種問題に關する彼の著書を掲げておく。

Dichterische Einbildungskraft und Wahnsinn Lepzig 1886

Die Entstehung der Hermeneutik. (Philosophische Abhandlungen Sigwart gewidmet 1900)

又我京都大學にはないから調べる事は出來ないが次の一篇等は非常に面白いものであらう。

Beiträge zur Losung der Frage von Ursprung unseres glaubens an der Realität der Aussenwelt und seinem Recht (Sitzungsbericht der Kögl. Preussische Akademie der Wissenschaftten 1890)

（完）